

II. 街路樹に見られる害虫

イラガ・鱗翅目（イラガ科）	
主加害樹	■サクラ、ウメ、ヤナギ、カエデ、サルスベリなど
加害形態	■多種の樹木の葉を食害する。 ■幼虫は刺毛（しもう）をもつ不快害虫で、人体への二次被害があるため注意が必要である。
虫の形態	■幼虫は成熟すると体長は24mmに達し、頭部は淡褐色、胴部は緑色で前後に暗紫色（あんししょく）の模様がある。 ■体表には刺毛があり、これに触れると激痛が走る。
発生様式	■年に1～2回の発生。繭内で越冬した幼虫は5月に蛹化する。 ■6月に羽化した成虫は葉面に1～2粒ずつ産卵する。 ■孵化幼虫は葉に小孔をあけて食害するが、成長すると葉縁から食害するようになる。繭は枝に作る。
主な防除法	■冬に枝の又などの繭を除去する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



ヒロヘリアオイラガ・鱗翅目（イラガ科）	
主加害樹	■サクラ類、カエデ類、ナンキンハゼ、カシ類、カキ、リンゴなど多くの樹木
加害形態	■多種の樹木の葉を食害する。 ■幼虫は刺毛をもつ不快害虫で、人体への二次被害があるので、夏季剪定時や果実の収穫時には注意が必要である。
虫の形態	■孵化後の幼虫は集団で行動し、成熟すると体長は20～23mmに達する。 ■体は黄緑色で、背面中央に青藍色（せいらんしょく）の縦線がある。 ■外来種で西日本での被害が多いが、関東まで拡がりつつある。
発生様式	■年に2回の発生。 ■幹や枝に作られた繭内で越冬し、成虫は6月と8～9月に出現する。 ■卵は葉裏に数十個の卵塊状に産みつける。 ■若齢幼虫は集団で樹木の葉面を食害するため被害葉は透けるようになる。 ■成長した幼虫は葉縁から葉全体を食害する。
主な防除法	■発生初期に葉・枝を切除し処分する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



オビカレハ・鱗翅目（カレハガ科）	
主加害樹	■ウメ、カイドウ、サクラ類のバラ科の樹種など
加害形態	■雑食性でバラ科の他にヤナギ類、ニレ類などの葉を食害する。 ■孵化後は巣で集団生活し夜間に葉を食害するが、老熟すると分散し単独で食害するようになる。 ■大量発生すると樹木全体の葉を食べ尽くすことがある。
虫の形態	■幼虫は成熟すると体長 55mm に達する。 ■頭部は灰青色。胴部は鮮やかな青色で、黒・橙・白色の縦線がある。 ■幼虫ががウメを食害することから「ウメケムシ（梅毛虫）」、枝や幹の分岐部に灰色の糸で巣をつくることから「テンマクケムシ（天幕毛虫）」と呼ばれる。
発生様式	■年に 1 回の発生。 ■枝に取り巻くような卵塊を産み付け、卵で越冬する。 ■翌春の 3 月中旬から孵化し、幼虫は絹糸で作った天幕内で集団生活する。 ■5 月下旬頃には老熟し、葉や樹皮の割れ目に繭を作り蛹化し、約 2 週間後に成虫となる。
主な防除法	■天幕状の巣を焼く。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



マツカレハ・鱗翅目（カレハガ科）	
主加害樹	■アカマツ、クロマツ、ゴヨウマツ、ヒマラヤスギ、カラマツ、モミ、トウヒなどの針葉樹
加害形態	■幼虫は大型でマツケムシと呼ばれ、マツ類の重要害虫である。 ■針葉を食害し、終令幼虫の食害量は極めて大きいため、大量発生すると樹勢が低下する。 ■幼虫は刺毛をもつ不快害虫で、人体への二次被害があるので注意が必要である。
虫の形態	■幼虫は成熟すると体長 60mm に達する。 ■頭部は黒色、胴部は銀色ないし黄褐色の斑紋（はんもん）がある。
発生様式	■年に 1 回の発生。暖地では年に 2 回発生することもある。 ■幼虫が樹皮の割れ目や針葉の基部、根元などで集団で越冬する。 ■3～4 月頃から枝先に移動して食害を始める。 ■6～7 月に繭を枝先などに作り、7～8 月に成虫が出現する。 ■8～9 月に針葉に卵塊を産みつける。
主な防除法	■秋から冬にかけて幹にコモを巻き、越冬する幼虫をコモごと焼却する。 ■6～7 月に作られた繭や 8～9 月に針葉に産みつけられた卵塊を除去する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



モンクロシャチホコ・鱗翅目（シャチホコガ科）	
主加害樹	■サクラ、ウメ、カイドウ、ナシ、リンゴなどバラ科植物
加害形態	■サクラにときどき異常発生し、葉を食い尽くすことがある。
虫の形態	■幼虫は成熟すると体長約 50mm に達する。 ■頭部は黒色、胴部ははじめ赤褐色であるが、成長すると紫黒色に変わり、黄白色の長毛（ちょうもう）を密生させる。
発生様式	■年に 1 回の発生。成虫は 7 ～ 8 月に出現して、葉裏に約 30 粒の卵を塊状に産み、8 月下旬に孵化する。 ■幼虫は 3 齢まで集団で食害するが、その後に分散する。10 月ごろ地上に降り、土中で繭（まゆ）を作って蛹化し、蛹（さなぎ）で越冬する。
主な防除法	■発生初期に葉・枝を切除し処分する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



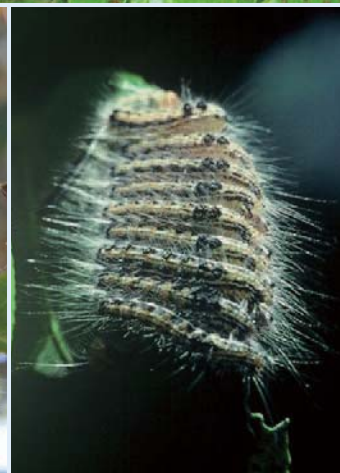
マイマイガ・鱗翅目（ドクガ科）	
主加害樹	■サクラ類、コナラ、ハンノキ、クリ、カラマツなどバラ科、ブナ科の樹種
加害形態	■雑食性（広葉樹から針葉樹まで 300 種以上）で大型の幼虫が葉を食害する重要害虫である。 ■しばしば大発生することがあり、大きな被害となることがある。
虫の形態	■幼虫は背面に目立つ 2 列の点が並び、成熟すると体長 60mm に達する。 ■頭部は黄色褐色で顔面に八字形の黒紋がある。 ■体には刺毛があり、刺されると少し痛い、毒は 1 齢幼虫しかない。 ■幼虫は糸を吐いてぶら下がり移動するため「ブランコケムシ」と呼ばれる。 ■成虫の雄は茶褐色で体長 20 ～ 50mm 程度、雌は白色で体長 50 ～ 100mm 程度となる。
発生様式	■年に 1 回の発生。 ■樹幹で卵塊の状態越冬する。 ■4 月頃に孵化して食害し、6 月頃に樹上で蛹となる。 ■成虫は 7 ～ 8 月に出現し、樹幹などに 200 ～ 300 粒の淡黄色の卵を塊状に産み付け、表面に体毛を被う。
主な防除法	■幼虫を捕殺する。 ■樹幹の卵塊を除去する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



チャドクガ・鱗翅目（ドクガ科）	
主加害樹	■ツバキ、サザンカ、チャノキなど
加害形態	■葉を食い尽くすことがある。 ■本虫は毒毛を持つ不快害虫でもあり、人体への二次被害に注意する必要がある。
虫の形態	■孵化（ふか）後、幼虫は集団で行動し、成熟すると体長 25mm に達する。 ■頭部は黄褐色、胴部は淡黄褐色で各節には長い白毛の生えた黒褐色の瘤（こぶ）がある。
発生様式	■年に 2 回の発生。枝や葉裏（はうら）で卵塊（らんかい）の状態越冬し、4 月下旬に孵化する。 ■幼虫は 4～6 月と 7～9 月に出現する。前者の幼虫は新葉を食害するが、後者の幼虫は、はじめ葉の表皮を残して葉肉（ようにく）だけを食べるので、円形の褐色痕が残る。
主な防除法	■発生初期に葉や枝を切除し、処分する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



モンシロドクガ・膜翅目（ドクガ科）	
主加害樹	■サクラ類、ウメ、クヌギ、コナラ、イヌマキなど
加害形態	■幼虫は葉を食害する。 ■多数の微細な毒刺毛を持ち、触れると皮膚炎を起こす。
虫の形態	■成虫は 30～40mm 程度。翅は白色。 ■幼虫は体長 20～25mm で、黄色地に黒色の斑点がある。
発生様式	■年に 2～3 回の発生。 ■若齢幼虫で越冬する。 ■成虫は 5～6 月に出現し、葉裏に卵塊状に産卵する。 ■孵化幼虫は葉縁に群生するが、成長すると分散して食害するようになる。
主な防除法	■発見次第、捕殺する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食葉性害虫



モッコクハマキ・鱗翅目（ハマキガ科）

食葉性害虫

主加害樹	■モッコク
加害形態	■枝の先端の葉を2～3枚綴り合わせ、その中で葉肉を食害する。 ■被害葉は褐変するが、糸で綴られているため枝上に残り、美観を損なう。 ■被害は夏期に多い。
虫の形態	■赤紫色の幼虫は、成熟すると体長が約15mmに達する。 ■成虫は開張した体長が17～20mm。
発生様式	■年に3～4回の発生。 ■綴られた被害葉の間で蛹で越冬する。 ■成虫は4月下旬頃から羽化し葉面に産卵する。 ■孵化した幼虫はすぐに葉を綴り、その中で生活して加害する。
主な防除法	■綴っている枝葉を切除し幼虫を捕殺する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



アメリカシロヒトリ・鱗翅目（ヒトリガ科）

食葉性害虫

主加害樹	■サクラ類、プラタナス類、クルミ、ヤナギ類、ポプラ類、ミズキ、ハナミズキなど
加害形態	■雑食性で様々な樹種の葉を食害する。 ■孵化幼虫は枝先に集団で絹糸を張って袋状の巣を作り、群がって葉肉のみを食害する。 ■成長すると独立するが、葉脈を残して全体を食害するため、発生量が多いと樹勢が低下する。
虫の形態	■幼虫は成熟すると体長30mmに達する。 ■頭部は黒色、胴部背面は灰黒色で、側面は淡黄色で、白い長毛が密生する。 ■成虫は全体的に灰白色。 ■アメリカから侵入した害虫。
発生様式	■年に2回の発生。 ■樹皮の割れ目などで、毛の混じった白色の繭を作り、その中で蛹態で越冬する。 ■成虫は5月中旬～6月中旬、7月下旬～8月下旬に出現する。 ■卵は葉に200～800粒の塊に産む。 ■老熟すると加害木から降り、樹皮の割れ目などに入って蛹化する。
主な防除法	■発生初期に白い袋状の巣を葉・枝ごと切除し処分する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



クスサン・鱗翅目（ヤママユガ科）

食葉性害虫

主加害樹	■クスノキ、サクラ類、イチヨウ、ケヤキ、サルスベリ、クヌギ、クリ、トチノキ、モミジバフウ、カシ類など
加害形態	■雑食性でクスノキ、イチヨウ、サクラ類など様々な樹種の葉を食害する。 ■大量発生して食害が激しくなると樹木全体の葉を食い尽くすため、樹勢が低下する。
虫の形態	■成虫は 100mm 以上の大型で、羽の色は黄褐色。 ■幼虫は成熟すると体長 80mm にも達し、白色の長毛に覆われるので「シラガタロウ（白髪太郎）」と呼ばれる。
発生様式	■年に 1 回の発生。 ■樹幹に生みつけられた卵で越冬し、4 月ごろ孵化する。 ■6 月下旬頃から老熟した幼虫が、かご状の繭をつくり、その中で蛹になる。繭は、その形と中が透けて見えることから「スカシダワラ（透かし俵）」と呼ばれる。 ■成虫は 9 月下旬頃から現れて、黄褐色で大型のガとなる。 ■枝や幹の分岐点に塊状に産卵する。
主な防除法	■夏季に繭を取り除いたり、冬季に卵塊を除去する。 ■孵化直後の幼虫は群生するため、葉を切除する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



ニレチュウレンジ・膜翅目（ミフシハバチ科）

食葉性害虫

主加害樹	■ニレ類
加害形態	■幼虫はアキニレ、ハルニレなどの葉を食害し、葉を食い尽くすことがある。 ■大量発生で食害が激しくなると樹勢が低下する。
虫の形態	■孵化後、幼虫は集団で行動し、成熟すると体長約 20mm 程度となる。 ■頭部は黒色、胴部は淡緑色で、成熟すると背面に黒点が現れる（写真は若齢幼虫）。 ■成虫は体長約 10mm。 ■成虫の体は青藍色で胸部の大部分は赤い。翅はほぼ全体が暗色を帯びる。
発生様式	■年に 2 回の発生。 ■繭内で幼虫越冬し、翌春蛹化する。 ■成虫は 4 月から 9 月まで出現し、葉緑の鋸歯内に産卵する。 ■孵化幼虫は群棲して葉脈を残して葉を食害するが、成長すると分散して食害するようになる。 ■成熟幼虫は土中で白い繭を作って越冬する。
主な防除法	■発生初期に群棲している葉・枝を切除し処分する。 ■冬季に落葉を集めて焼却する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



ヤノナミガタチビタマムシ・甲虫目（タマムシ科）

食葉性害虫

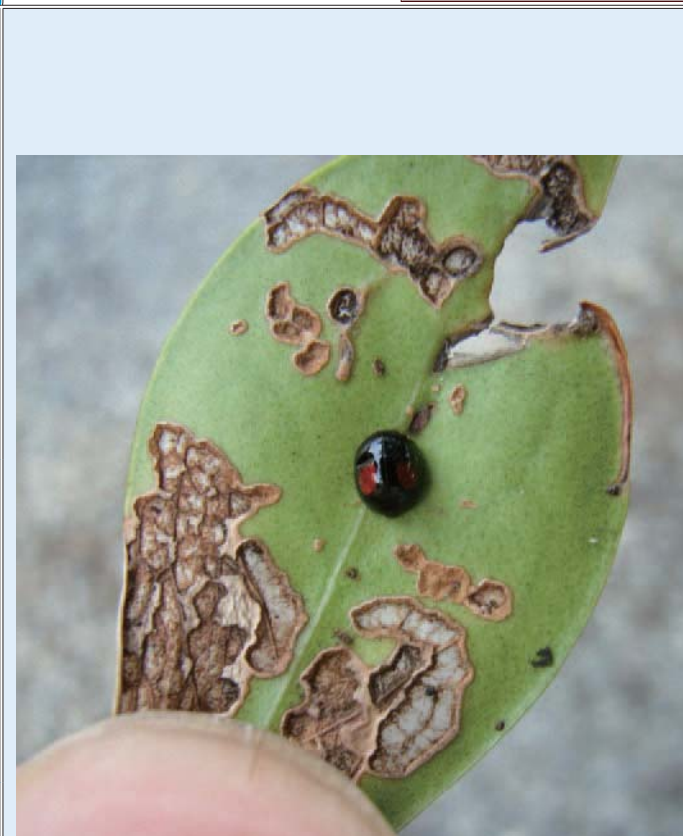
主加害樹	■ ケヤキ、ムクノキなど
加害形態	■ 幼虫は、葉肉内に潜って食害する。被害葉は赤褐色となり早期に落葉する。 ■ 成虫は不規則に葉縁から不規則に食害する。 ■ 食害が大きくなると褐変して目立つようになり、大発生している場合には早期落葉の原因となる。
虫の形態	■ 成虫は体長 3 ～ 4mm の卵形。 ■ 成虫は、光沢のある褐色の 3 本の波型をした銀白色の横帯がある。
発生様式	■ 年に 1 回の発生。 ■ 成虫は、ケヤキの樹皮下などで集団越冬し、翌春の芽吹きごろから活動をはじめ、5 月以降に葉縁に産卵する。 ■ 7 月頃、成虫になる。
主な防除法	■ 葉の食害で成長が悪くなることはあるが枯れることはないため、急いで防除する必要はない。 ■ 防除する場合は、幼虫や蛹とともに早期落葉した被害葉を集めて焼却する。また、「こも巻き」により冬にこも内で越冬している成虫を焼却する。



テントウノミハムシ・甲虫目（ハムシ科）

食葉性害虫

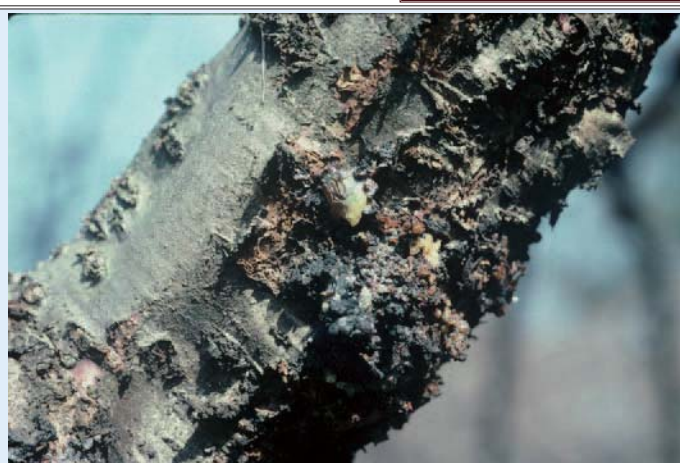
主加害樹	■ ヒイラギ、モクセイ、ヤチダモなど、モクセイ科の樹木
加害形態	■ 幼虫、成虫ともに葉を食害する。 ■ 被害葉は、褐変して著しく美観を損ねる。
虫の形態	■ テントウムシに似た成虫は体長 3 ～ 4 mm。 ■ 翅は黒色の地に 2 個の赤い点紋を有するものが多く、個体間で異なる。 ■ 幼虫は、成熟すると体長約 5mm に達し、体は乳白色である。
発生様式	■ 年に 1 ～ 2 回の発生。 ■ 成虫で越冬して、翌春 5 月上旬から葉を不規則に食害する。 ■ 5 月下旬頃に葉裏に卵を産む。 ■ 6 月頃に孵化した幼虫は、葉肉に潜って食害する。 ■ 7 月頃に成熟した幼虫は被害葉から出て土中で蛹になる。 ■ 夏に羽化した成虫は秋まで葉を食害して、落葉の中で越冬する。
主な防除法	■ 農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



コスカシバ・鱗翅目（スカシバガ科）

穿孔性害虫

主加害樹	■サクラ類、ウメ、モモ、リンゴ、スモモなど
加害形態	■幹の樹皮下に穿孔し、虫糞の混じった半透明のヤニを排出する。 ■被害木は形成層を食害されるため、樹勢が低下する。 ■穿孔した部分から胴枯病菌や腐朽菌の侵入を受けやすくなる。
虫の形態	■幼虫は成熟すると体長 25mm に達する。 ■胴部は乳白色で、頭部は淡褐色である。 ■成虫はハチのように透明な翅を持つ。
発生様式	■年に 1 回の発生。 ■穿孔した幼虫は樹皮下で越冬し、翌春に再び食害して、樹皮下で蛹化する。 ■成虫は 5 月下旬から 10 月下旬まで羽化するが、最盛期は 9 月。 ■樹皮の割れ目や傷口に産卵する。 ■孵化した幼虫は直ちに樹皮下に穿孔し褐色の木屑と虫糞を排出する。
主な防除法	■若枝、枝、球果を切除し処分する。 ■幹を切開して幼虫を除去する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



コウモリガ・鱗翅目（コウモリガ科）

穿孔性害虫

主加害樹	■ヤナギ類、ポプラ類、ハンノキ、シラカンバ、コナラ、クヌギ、クリ、カシ類、スギなどの広範囲の広葉樹と針葉樹
加害形態	■多犯性で幹に穿孔して加害する重要害虫である。 ■被害木は枯損や風折れを受けやすくなる。
虫の形態	■成虫は開張 50 ～ 100mm 程度。 ■体は茶褐色で、前翅には灰緑色の雲状紋と小黑紋がある。 ■幼虫は成熟すると体長 80mm に達する。 ■頭部は褐色で、胴部は黄白色である。
発生様式	■2 年に 1 回の発生。 ■卵で越冬し 4 ～ 5 月頃に孵化する。 ■孵化した幼虫は、地表の雑草の茎を摂食し、成長してから樹木の幹などに移動して地際の樹皮を環状に食害し、材内に穿孔する。 ■穿孔部に木くずと虫糞を糸でつづった袋状の蓋をつける。 ■穿入孔に繭をつくって蛹化する。 ■成虫は 8 月下旬～ 10 月中旬に羽化し、夕暮れ時に活発に飛翔しながら数多くの卵を産み落とす。
主な防除法	■初期幼虫期に農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



クワカミキリ・甲虫目（カミキリムシ科）

穿孔性害虫

主加害樹	■クワ、ポプラ類、ヤナギ類、カシ類、ケヤキ、イチジクなど
加害形態	■幼虫が幹、枝の材部に穿孔することで、樹勢が低下したり、場合によっては枯死に至る。 ■加害部は地上 0.7 ～ 2m 付近に多い。 ■成虫が枝をかじることによって枝枯れが生じる。
虫の形態	■成虫は体長 35 ～ 45mm で、体色は黒褐色であるが、全体に黄褐色の微毛を密生するため黄褐色にみえる。 ■幼虫は、成熟すると体長 70mm に達し、胴部は、少し赤みを帯びた乳白色である。
発生様式	■2 ～ 3 年に 1 回の発生。 ■幼虫は穿孔内で越冬し、5 ～ 6 月に蛹化する。 ■成虫は 7 ～ 9 月に出現して新梢の樹皮を後食する。 ■幹、枝の樹皮に馬蹄形の噛み傷をつけ、その中に産卵する。 ■孵化した幼虫は樹皮の下に潜り、小さな穴をあけ木屑を固めて排出する。
主な防除法	■成虫を捕殺する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



ゴマダラカミキリ・甲虫目（カミキリムシ科）

穿孔性害虫

主加害樹	■プラタナス類、カエデ類、ポプラ類、ヤナギ類、カシ類、シイ類など各種の広葉樹
加害形態	■成虫は各種の広葉樹の葉や小枝を食害する。 ■幼虫は、はじめ樹皮下を食害するが、成長すると木部へ穿孔して材を食害する。 ■幼虫が材部を穿孔すると直径 1 ～ 2cm ほどのトンネルができ、樹勢が低下するとともに幹や枝が折れやすくなる。
虫の形態	■成虫は、体長約 25 ～ 35mm 程度。上翅は光沢のある黒色で白い斑点が散在する。 ■幼虫の胴部は乳白色で、成熟すると体長は 60mm に達する。
発生様式	■2 年に 1 回の発生であるが、1 年に 1 回のこともある。 ■幼虫は、穿孔内で越冬し翌春に蛹化する。 ■成虫は 6 ～ 8 月に出現し、葉や小枝の表皮を浅く後食する。 ■地際の樹幹の樹皮に 10mm 程度の噛み傷をつけて産卵する。 ■幼虫は、成長すると木部へ穿孔する。 ■被害部からは、繊維状の木屑が排出される。
主な防除法	■成虫を捕殺する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



マツノマダラカミキリ・甲虫目（カミキリ目）	
主加害樹	■アカマツ、クロマツなどのマツ類
加害形態	■マツノザイセンチュウを媒介するカミキリであり（媒介昆虫）、マツ枯損を引き起こす重要害虫である。
虫の形態	■成虫は体長 20 ～ 30mm。 ■上翅は暗赤褐色で不規則な灰白紋が散在し、まだら模様である。 ■幼虫は成熟すると体長 40mmに達し、胴部は乳白色である。
発生様式	■普通、1年に1回の発生であるが、寒冷地では2年に1回発生する個体もある。 ■成虫は5月下旬から7月にかけ、被害木に直径約5mmの円形の飛孔をあけて脱出する。脱出した成虫は、マツの当年生から3年の枝の樹皮をかじる。この成虫の摂食を後食と呼ぶ。 ■カミキリの気管内に侵入していたマツノザイセンチュウは、後食のときに気管内に侵入する。マツノザイセンチュウの侵入したマツは樹脂の滲出が停止してマツ材線虫病にかかり、マツは枯死する。 ■幼虫は内樹皮と辺材部を浅く食害した後、材内に穿孔し、秋に蛹室を作り越冬する。翌春5月に蛹化。材内にいるマツノザイセンチュウはカミキリが羽化した直後に気門から気管内に侵入し、カミキリ成虫によって健全なマツへと運ばれる。
主な防除法	【幼虫の駆除】 ■被害木の伐倒焼却処理、伐倒くん蒸処理、チップ化処理。 【成虫の防除】 ■成虫の発生期にトラップで捕殺する。 ■事前に樹幹注入を実施する。 ■成虫発生期に農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

穿孔性害虫



クリオオアブラムシ・半翅目（アブラムシ科）	
主加害樹	■クリ、クヌギ、カシ類など
加害形態	■春から秋にかけて枝に群生して、吸汁加害する。 ■排泄物にすす病が発生すると、苗木では樹勢が低下する。
虫の形態	■無翅雌成虫の体長は4～5mmで光沢のある黒色である。 ■有翅成虫はやや小さく約4mm程度である。
発生様式	■年間の発生回数は不明。 ■卵で越冬して翌春4月頃から孵化し、12月頃まで発生を繰り返して加害する。 ■孵化幼虫は新梢や枝から樹液を吸って发育し、無翅雌成虫となる。 ■5月頃に発生する有翅の成虫は、クリやクヌギ、カシ類に分散する。 ■10月頃、越冬卵を産む成虫が出現し、交尾して10月末～12月上旬に幹や主枝に群がって産卵する。
主な防除法	■冬季に越冬中の卵塊を除去する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

吸汁性害虫



ワタアブラムシ・半翅目（アブラムシ科）

吸汁性害虫

主加害樹	■ムクゲ、フヨウ、ボケ、シャリンバイなど、多種の緑化樹木
加害形態	■新梢や葉などに寄生して吸汁する。 ■発生が多いと新梢の成長が止まり、葉は萎縮してすす病を併発するため、著しく美観を損ねる。
虫の形態	■無翅胎生雌虫は体長約 1.5mm。 ■体色は黄色～緑色、青緑色など変化に富んでいる。
発生様式	■4月から10月まで発生を繰り返す。 ■卵で越冬して翌春4月頃に孵化し、若葉に寄生する。 ■5月に有翅胎生雌虫が生じ、中間寄主のザクロなどへ移動して繁殖を繰り返したのち、さらにナス、キュウリなどの第2次中間寄主へと移住して繁殖を繰り返す。 ■秋に再びムクゲやフヨウなどに戻り、雌、雄成虫が出現して交尾、産卵する。
主な防除法	■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



ルビーロウムシ・半翅目（カタカイガラムシ科）

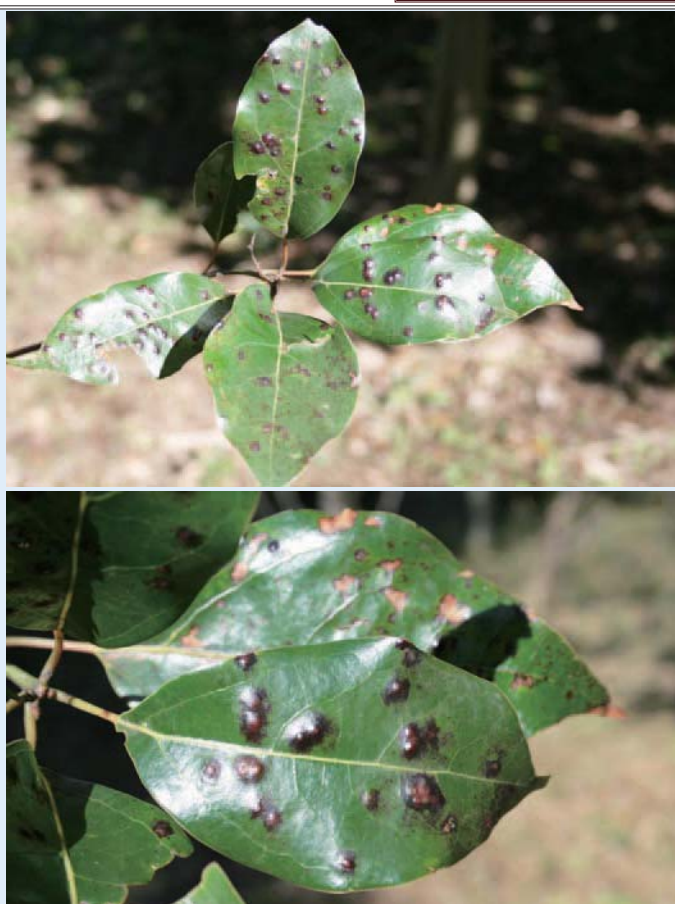
吸汁性害虫

主加害樹	■モチノキ、ウメ、ウメモドキ、ゲッケイジュ、ツバキ、モッコク、クチナシなど
加害形態	■極めて雑食性で各種の広葉樹の枝、幹などに寄生して吸汁し、樹勢を低下させる。 ■すす病を併発させて美観も損ねる。
虫の形態	■成虫は直径4～5mm、中高で赤褐色ロウ状のかいがらに被われる。気門から白色の分泌物を出す。
発生様式	■年に1回の発生。 ■成虫は9～10月の間に出現し、そのまま越冬し、翌年5月にかいがら下に産卵する。 ■6～7月に幼虫となる。
主な防除法	■少ない発生の場合には、そぎ落とす。 ■初期幼虫に農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



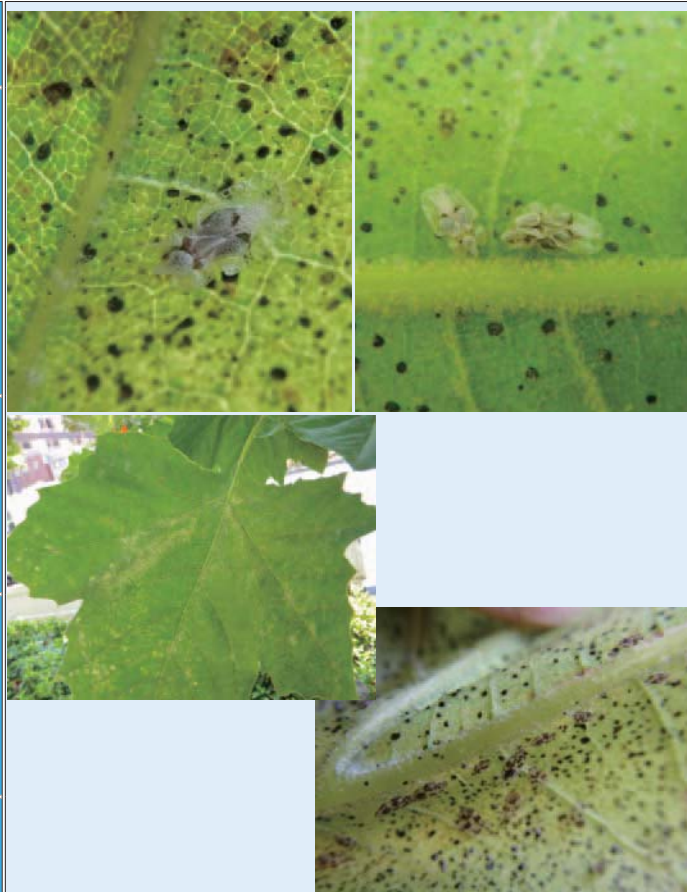
クストガリキジラミ・半翅目（キジラミ科）	
主加害樹	■クスノキ
加害形態	■クスノキの葉に虫えいを作り、葉裏から虫えい内に入り吸汁する。 ■実害は小さいが、美観を損ねる。
虫の形態	■成虫は、淡黄色でアブラムシに似ている。
発生様式	■年に1回の発生。 ■幼虫が虫えい内で越冬し、翌春に再び発育を始める。 ■4月上旬に虫えいから羽化した成虫は新たに展開し始めたクスノキの新葉に産卵する。 ■5月頃に孵化した1齢幼虫が吸汁を開始すると虫えいができる。
主な防除法	■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

吸汁性害虫



プラタナスダンバイ・半翅目（ダンバイムシ科）	
主加害樹	■主にプラタナス類、他にクルミ科、ブナ科、クワ科、カエデ科等
加害形態	■成虫、幼虫ともに葉裏に寄生して、葉裏から吸汁する。 ■吸汁により、葉表に白いかすり状の脱色斑が生じ、葉が黄白色～白色に見えるようになる。 ■被害が激しいと、樹冠全体が白化して、美観が著しく損なわれる。 ■葉裏は、黒い粘液状の排泄物により汚れる。
虫の形態	■成虫は、体長約3.5～3.7mmで単配型をしており、体は半透明であるが表面の網状斑で乳白色に見える。 ■終齢幼虫は、黄褐色で頭部全体及び腹部の背面中央に多数の棘状の特記がある。
発生様式	■国内では、平成13年に名古屋で確認された。 ■成虫は、梅雨明け頃からあらわれ、年に3世代を繰り返す。 ■10月頃から、樹皮下に移動し、成虫態でまとまって越冬する。
主な防除法	■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

吸汁性害虫



ニレハムシ・鞘翅目（ハムシ科）

吸汁性害虫

主加害樹	■主にケヤキ、アキニレ、ハルニレなどのニレ科
加害形態	■幼虫と成虫が葉を食害する。 ■食痕は褐色に変色して枯死するので、著しく美観を損ねる。
虫の形態	■成虫は褐色の甲虫で、体長6mm内外。 ■幼虫は、黄色で黒点が散在した模様で、体長8～10mm程度。
発生様式	■4月下旬～5月上旬に越冬成虫が出現する。 ■5～8月頃まで、幼虫と成虫が混在して加害する。 ■第2世代は、8月中旬～落葉期まで見られる。
主な防除法	■幹に粘着テープを巻いて、蛹化するために根元へ移動する幼虫を捕捉する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



トチノキヒメヨコバイ・半翅目（ヒメヨコバイ科）

吸汁性害虫

主加害樹	■トチノキ
加害形態	■葉の裏面に寄生し、吸汁する。 ■多発すると、葉が著しく退色（緑を失って黄化、さらに褐変）し、著しく美観を損ねる。 ■被害が大きくなると、晩夏に落葉に至る。
虫の形態	■成虫は、体長約3.5mm、翅には斑紋がなく、敏捷に跳びはねる。 ■孵化直後の幼虫は、体長約0.5mmと非常に小さく、老齢幼虫の形は翅のない成虫とほとんど同じ。
発生様式	■越冬した幼虫は、4月下旬頃から現れ、次世代の成虫は6月下旬以降に出現する。 ■年間5～6回程度の発生が繰り返される。
主な防除法	■孵化直後の成虫が多い6月上旬に、農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。



カシフシダニ・ダニ目（フシダニ科）	
主加害樹	■カシ類
加害形態	■カシフシダニの加害により、葉表にいぼ状の虫えいが無数にできる。 ■葉裏は凹んで白色～淡褐色の苔を密生する。
虫の形態	■カシフシダニはクサビ形の微少なダニで、肉眼での確認はできない。
発生様式	■5～6月頃にカシ類の葉裏に寄生し、9月頃まで加害する。
主な防除法	■葉ごと切除して焼却する。 ■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

吸汁性害虫



ドウガネブイブイ・甲虫目（コガネムシ科）	
主加害樹	■成虫はウメ、クリ、コナラ、カキ、イヌマキ、ブドウ、幼虫はスギ、ヒノキなどの苗木
加害形態	■成虫は雑食性で多くの広葉樹の葉を食害する。 ■幼虫は苗木の根を食害する。
虫の形態	■成虫の体長は20～25mmで、体は銅色をしている。 ■幼虫は、成熟すると体長40mm程度で、体は乳白色である。
発生様式	■成虫は年1回の発生。 ■土中で越冬した成熟幼虫が、翌春5月頃に蛹化する。 ■成虫は6～9月に出現する。 ■成虫は土中に浅く潜って産卵する。 ■卵は7月頃に多く孵化し、幼虫は堆肥などの腐熟した有機物を食べるが、植物の根なども食害する。
主な防除法	■農薬取締法に基づき登録された農薬を散布する。

食根性害虫

